

キングス&クイーン

2006(平成18)年9月28日鑑賞<PLANET+1 試写室>

★★★★



監督・脚本＝アルノー・デプレシャン／出演＝エマニュエル・ドゥヴォス／マチュー・アマリック／ヴァランタン・ルロン＝ダルモン／モーリス・ガレル／ナタリー・ブトゥフ／ジョアサン・サランジェ／オリヴィエ・ラブルダン／ジャン＝ポール・ルシヨン／ノエミ・ルヴォヴスキ／ジル・コーエン／イポリット・ジラルド／カトリーヌ・ドヌーヴ／マガリ・ヴォック (boid 配給／2004年フランス映画／150分)

……最初の夫との間に生まれた息子を連れながら、今3度目の結婚を控えたノラは、父重症の知らせの中、あらためて自分の人生を走馬灯のように……。そんなヒロインの自由でたくましい生き方と、今、精神病院に「措置入院」させられた人生脱落組(?)の2番目の元夫イスマエルの生き方は、どこで交わり、どこですれ違うのだろうか……。2時間30分という長尺ドラマの中には親族や友人たちを含むストーリーがいっぱいで、観ていて疲れることまちがいなし……。しかし、こんな映画を観て、最後には「人生はすばらしい!」と言えたらあなたも立派なおトナ……。たまには、「トリュフォーの再来」と呼ばれるアルノー・デプレシャン監督による、難解だが骨太のこんな作品をじっくりと鑑賞してもらいたいものだ……。

これぞフランス流の人生大河ドラマ!

この映画は2時間30分という長尺モノで、ヒロインのノラ・コトレル(エマニュエル・ドゥヴォス)の新旧3人の夫たちや、父親、妹そして息子たちが登場。他方、もう1人の主人公である2番目の夫イスマエル・ヴィヤール(マチュー・アマリック)について、その両親や兄弟姉妹の他、その弁護士や精神科医そして「中国女」等が登場し、それぞれがノラとイスマエルのさまざまな人生模様絡んでくる。アルノー・デプレシャン監督は、それを第1部:ノラ、第2部:解放される恐ろしさ、エピローグの3部に分けているが、それはごく大掴みな分け

方で、物語自体は全体として統一されている。そのため、観客はきっちりと150分間スクリーンに集中することが必要。このように、これぞフランス流の人生大河ドラマという映画だから、かなり疲れることを覚悟のうえで……。

ヒロインは3度目の結婚目前の35歳の子持ち！

映画の冒頭、しっかりと自己紹介をしてくるヒロインは、今ジャン＝ジャック（オリヴィエ・ラブルダン）と3度目の結婚を目前にしている35歳の女性だが、最初の夫ピエール・コトレル（ジョアサン・サランジェ）との間に生まれ、今はノラの父親と暮らしている息子エリアス（ヴァランタン・ルロン＝ダルモン）がいる。彼女の悩みはエリアスがジャンになつかないことだが、ゴールインは秒読み段階。そんな導入部だけを見れば、いかにもフランス流の自己主張を貫いた自由な女性の生き方の実践者のように思えたが、父親のルイ・ジェンセン（モーリス・ガレル）をグルノーブルに訪れたところから状況は一変。作家であるルイは1人孤独の中で創作に励んでいたが、今その身体は末期ガンに冒され、あと数日の命。そこに電話をかけてきたノラの妹のクロエ・ジェンセン（ナタリー・ブトゥフ）も荒れた生活をしているようで、送金をせびるだけ……。そんな中、一人途方に暮れるノラのこれからの生き方は……。そんな中年のヒロインをエマニュエル・ドゥヴォスが何とも存在感豊かに堂々と演じているのが印象的……。

もう1人の主人公は人生の脱落者……？

この映画ではノラの2番目の夫イスマエルがもう1人の主人公になっているが、こちらはしっかり生きているノラと違い、人生の脱落者風……。観客にそう思わせるのは、彼が最初に登場するシーンが、後述する「第三者による措置入院」のシーンからだから……。イスマエルはフランス人特有の(?)よくしゃべる男だが、自分が正常であることを必死に訴えるしゃべり方を聞き、その感情の表し方を見ていると、誰でも「やはりこいつは……？」と思ってしまうはず……。

しかし、そんなイスマエルだからこそ、逆に悪友の弁護士のママンヌ（イポリット・ジラルド）や著名なカウンセラーの友人がいるのかも。そして措置入院後、イスマエルと向き合う女性精神科医ヴァッセを演ずるのは、あのフランスの大女

優カトリーヌ・ドヌーヴ。このヴァッセとイスマエルとの間で交わされる意味シ
ンな「神学論争」は、この映画の1つの見どころ……。このように、この映画の
中で展開される彼の生き方や長々としゃべりまくるそのセリフは人生訓に富んだ
ものばかりだから、ある意味で彼は人生の達人……。

そんな人生の達人をこちらにも実に印象強く演じているのがマチュー・アマルリ
ックだが、私が彼の演技を観ながら思い出したのが『ライフ・イズ・ビューティ
フル』(98年)で、5歳の息子に対し「これはゲームだよ」という悲しい嘘をつ
き通した父親ガイド役を演じたロベルト・ベニーニ(『シネマルーム1』48頁参
照)。本人は一生懸命演じているのだが、それが何となくユーモラスで涙を誘う
演技。この映画でもそんなすばらしさを是非味わってもらいたいものだ。

ノラとイスマエルの接点は……？ イスマエルの決断は……？

父親の重症を知ったノラがとった行動は、ジャンにイスマエルの所在を調べさ
せ、イスマエルが入っている精神病院を訪れるという意外なもの。そのうえ、そ
こでノラがイスマエルに申し入れたのは、「エリアスを養子にしてほしい」とい
う唐突なものだった。それはなぜ……？ それは、父親がこの世からいなくなる
ことを実感したノラが、自分が死亡すればジャンになつかないエリアスが独りぼ
っちになってしまうと考えたため。しかしそれは、ある意味これから結婚しよう
というジャンに対して失礼だし、イスマエルに対しては無理難題をふっかける非
常識な要請だと私は思うのだが……。いったん別れた妻から、先夫の子供の養父
になってくれと言われて素直にオーケーするバカはいないのでは……？ そのう
え、イスマエルは今、不当に措置入院させられた病院からどうやって抜け出そう
かという算段で頭の中はいっぱい……。さてイスマエルはそんな中、この申し入
れをどう受け止め、どう決断するのだろうか……？

何とも意味シンの「解放される恐ろしさ」……？

第1部で展開される「そんなこんな物語」はそれなりにわかりやすいが、第
2部のテーマは「解放される恐ろしさ」という意味シンのもの。そしてこれぞフ
ランス流、そしてアルノー・デプレシャン監督流で、一転して難解なものに……。

まず驚くのが、父親の手術を前に戸惑うノラの前に、突然死んだはずのピエールが登場してきたこと。天国から登場してきた(?) ピエールはいい奴だったが、父親の看病で疲れ切ったノラがピエールの亡霊と対面する中で展開されていくさまざまな過去の物語は壮絶そのもので、ピエールの死亡にも深いワケが……?

さらに、死亡直前まで次の出版物『孤独な騎士』という日記集の校正作業をやり続ける父親と、それを依頼する編集者との関係も少し不気味……。ちなみに、この遺稿となった日記集の中に書かれてあった父親のメモには、娘に対する何とも辛辣でシニカルな批判が……。これには多くの観客がアッと驚くはず……。

「中国女」との出会いとその成り行きは……?

フランスは多くの移民を受け入れているが、その中に中国人もたくさんいることは張曼玉^{マギー・チャン}が出演した『オーギュスタン／恋々風塵』(99年)をみても明らか(『シネマルーム9』329頁参照)。しかし、この映画に登場する「中国女」と呼ばれる精神病院の常連入院患者のアリエル(マガリ・ヴォック)はかなり変わったキャラの持ち主だから、よく注目を!

そして、変わったキャラは変わったキャラと結びつくもので、イスマエルは同じ精神病院内で過ごすうち、この「中国女」と何となくいい雰囲気……。そのモーシヨンの掛け合いとすれ違いぶりは絶妙だったが、イスマエルは無事この精神病院を出ていくことになったから、2人は永遠のお別れ……。となるはずだったが、実はここにもアッと驚く人生模様が……。

イスマエルの両親と兄弟姉妹たちは……?

イスマエルが精神病院を退院することができたのは、彼が8年間通っていた著名なカウンセラーの名前が効いたよう。さらに、悪友の弁護士ママンヌの知恵も効果的だった……。しかし退院によって、無事昔のヴィオラ奏者の仕事に戻れると思っていたイスマエルの考えが甘かったことは、娑婆に戻った後の元楽団員の対応を見ればよくわかる。したがって、ここにもアッと驚く人間模様が……。

もっともイスマエルはそこで、「僕のヴィオラといってもそれは市民楽団のものだろ」と言われたため、イスマエルは実家に置いてある自分のヴィオラを思い

出すことに。さらに国税局によって家を差し押さえられたイスマエルは途方にくれた挙げ句、久しぶりに実家に戻るようになったのだが、これが結果的に大成功。そこで両親と再会し、のんびりとした生活を送っているうち、ホントにイスマエルの精神状態も平穩に……。イスマエルの両親、特にコンビニを経営している父親アベル・ヴィヤール（ジャン＝ポール・ルシヨン）の豪傑ぶりにはあなたもビックリするはず……。しかし、ここでも父親の遺産相続をめぐる遺言絡みの「家族会議」の中、姉のエリザベート（ノエミ・ルヴォヴスキ）や兄弟姉妹たちの思惑があれこれと……。これはどこでもよくある遺産をめぐる人間模様だが、そんな中に入るとイスマエルの天衣無縫ぶりには一種の爽快感が……。

法律論その1 — 「第三者による措置入院」

この映画には前提となる3つの法律論がある。フランスと日本では、どこまで共通でどこが違うのか詳しいことはわからないが、弁護士兼映画評論家の私としては、とりあえずその論点の整理だけはしておきたい。

第1は、イスマエルに対する「第三者による措置入院」。いきなりドアの前に立った2人から「精神病院に措置入院してもらいます」と言われたイスマエルが、「そんなバカな!」と思ったのは当然だが、実はこれと似たような「措置入院」の制度は日本にもある。すなわち、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」23条は、「精神障害者又はその疑いのある者を知った者は、誰でも、その者について指定医の診察及び必要な保護を都道府県知事に申請することができる」と定めており、さらに、指定医による診察の義務（27条）、都道府県知事による入院措置（29条）等を定めている。フランスにもそれと同様の制度があるようで、それがこの映画に登場する「第三者による措置入院」。つまり、イスマエルに対して身内を含む第三者の申請によってその措置がとられたわけだ。もちろん、本人は必死に「僕は正常だ!」とわめき散らし抵抗するが、「措置」側はそんなイスマエルを合法的に拘束して精神病院へ。

法律論その2 — 死後認知

この映画では、ノラの息子が生まれる前に夫ピエールが死亡してしまったため、

両親や妹から産むのをやめるように説得されるシーンが登場する。そうなったのは、ノラがピエールとの間で正式な婚姻届を提出していなかったため。フランスは日本以上に「未婚の母」が堂々とまかり通っていると思っていたが、そのエピソードを見ていると意外にそうでもなさそう……？ そんな反対論を押し切って息子エリアスを生んだノラだったが、法律上ピエールと婚姻していないのだから、父親が認知しないことにはエリアスの父親は不存在となるのは当然。

これは日本でも全く同じで、子供から父親に認知してもらうためには、「認知の訴え」（民法787条）を提起し、勝訴判決を得る他ない。これには父親が認知を拒んでいる場合と父親が死亡した場合の2つのパターンがあるが、死後の訴え提起は3年間に限定されているので要注意！ ところがこの映画では、こんな「認知の訴え」の手続ではなく、ノラが強引に市役所にねじ込んでいく中で、既に死亡しているピエールとノラとの法的な婚姻関係を成立させてしまっていたが、これがフランスのいかなる法的手続によるものなのか私には全く不明。もし誰かわかる人がいれば、是非教えてもらいたいものだが……。

法律論その3—養子縁組

この映画の主人公はノラだが、このノラともう1人の主人公イスマエルを結びつけるのは息子のエリアスの存在。イスマエルはノラの2番目の夫だが、これもも籍を入れていない。しかし、エリアスはなぜかイスマエルにはよくなつたものの、ノラが今3度目に結婚しようとしているジャン＝ジャックには全然なついてこない。それくらい何とかなるだろうと思っていたノラだったが、父親の死亡という局面に遭遇する中、自分がもし死亡したらと考えると、エリアスのことが心配でならなくなってきたのは当然。そこでノラが選択したのは、エリアスをジャン＝ジャックの子供にするのではなく、イスマエルの養子にすること。つまり、イスマエルとの間で養子縁組をすることだ。これは私の知識では、イスマエルが了解してサインし、(15歳未満の息子)エリアスの母親ノラが了解しサインして、養子縁組届を提出すればいいだけだが、なぜかフランスではイスマエルの父親のサインが必要らしい……？ それは一体なぜ？

この養子縁組を巡ってはイスマエルの父親が養子だったことが明らかにされる

など、イスマエル一家を巡って実に複雑な人間関係が紹介されるからお見逃しのないように……。それはともかく、突然、別れた妻からそんな申し出を受けたイスマエルは戸惑い悩んだが、最終的な彼の決断は……？

法律論その4—安楽死

第4は、去る7月30日の夜に起こった作家吉村昭の尊厳死の決行(?)以来、昨今何かと話題性の多い「安楽死」。日に日にやせ細り、激痛に耐えている父親の姿を見続けていたノラは、遂にある日大量のモルヒネを投与するわけだが、この映画から観る限りの私の弁護士としての判断では、これは到底安楽死と認められるケースではなく、明らかに殺人罪に該当するもの。もっとも、映画はそこまでは踏み込まず、葬式の時にだけ戻り、文句をつけてきたクロエに対して反論するノラの姿が描かれているだけだが……。安楽死をどう捉えるのかは、この映画のような「人生論」からだけではなく、「法律論」からのアプローチも不可欠……。

「トリュフォーの再来」と言われても……

パンフレットを読むと、アルノー・デプレシャン監督自身が「僕が作るような映画は、10年前に比べて支持する人が減ってきているのが現状だ」と書いているように、コミックしか読まない今ドキの日本の若者たちにとって、こんな重厚な人生ドラマを理解するのは大変。また、現在の映画配給のシステム上からも、いくらいい作品であっても難しくて売れにくい映画は配給されず上映されないのは、資本主義の弱肉強食の面から言えば当然。さらに、そもそも今の大学生の9割以上は「トリュフォーって一体誰……？」と言うはずだから、そもそもトリュフォーをめぐる対話が成立するはずがなく、したがっていくらアルノー・デプレシャン監督が「トリュフォーの再来」と言われても……。ちなみに、ちょうど私がこの評論を書き上げた9月29日の日経新聞夕刊「シネマ万華鏡」に中条省平氏がこの映画を絶賛する評論が載っていた。私はそれを読んでなるほどと理解できたし共感することができたが、さて、いつもポップコーンを食いながら映画鑑賞をしている若者たちが、この評論をどこまで理解できるのやら……。

2006(平成18)年9月29日記